

TAKE FREE

ZMM+ | vol. 02

北海道教育大学岩見沢校 卒業生へのインタビュー



+ モエレ沼公園 管理業務

伊藤 宏介 ITO KOSUKE

Topics

書を楽しむ
経験を積む ~中国留学について~
制作と仕事のバランス
北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA+について

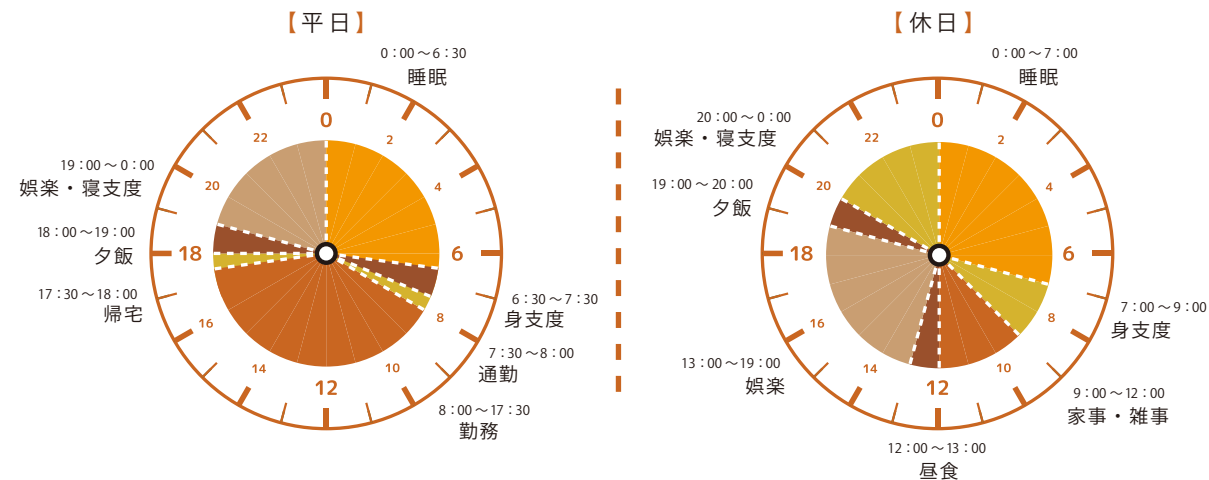
2020年より、新たに始まった i-BOX のシリーズ企画「ZAWA+」。本展では岩見沢(ZAWA) から飛び立った、卒業生のその後と現在(+)をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから十年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター… 様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。



イトウさんってどんな人？

HITOTONARI SPACE

Q.1 | イトウさんの一日



Q.2 | イトウさんの5カジョウ

- +
 - +
 - +
 - +
 - +
- 話す | 読む | 聞く | 見る | 書く

作品を作るために大切にしている事。疎かになっていないか、よく自分に問かける言葉。

Q.3 | 現在のお仕事



モエレ沼公園の外の管理をしています。



第55回 創文展 特選「破嵐」170×56cm/2019年
書道研究「書園」に所属し、制作活動を続けています。

vol. 02 + モエレ沼公園 管理業務

伊藤 宏介

1990年北海道江別市生まれ。習字は小学校5年生から中学校3年生まで続け、高校から部活動で書の道へ。高校卒業後に特にやりたいことがあったわけではなく、「書道で入れる大学があるよ」という高校時代の指導教員の言葉がきっかけで、岩見沢校を目指すことに。

在学中は芸術課程美術コース書専攻に所属し、辻井京雲教授に師事。卒業後は美唄市にある認定NPO法人アルテピアッツアびばいに勤務しながら辻井先生が代表を務める団体、書道研究「書園」に入会。2021年現在は「書園」に所属しながら、公益財団法人札幌市公園緑化協会に勤務。札幌市東区にあるイサムノグチ設計の「モエレ沼公園」で屋外管理業務を行う。樹木管理、芝生管理、土木作業や蜂の巣駆除など、公園の安全と景観管理を担っている。好きなものは、小林賢太郎、伊坂幸太郎、オードリー。

※本インタビューは、2021年10月22日、23日にJR岩見沢複合駅舎内明交流プラザ センターホールにて行われた、伊藤宏介さんの公開制作終了後にお時間を頂き行われたものです。



※3. 「噴水のひとり相撲を見ていたり」
相坂郁夫の句/266×97cm/2019年



※2. 「石塊と語るわがころかなしむべかり」
八木重吉の詩/138×139cm/2018年

「書の鑑賞は、なんて書いてあるのか…読むもの」として先に見てしまふ人が多いですね。書いてある文字を読みとることができず、鑑賞が止まってしまふ…それはとてももったいない。書は視覚芸術でもあるので、その観点から見てもいいですね。」

「書の中に「見せ場」やよく見える「字面」があること自体知りませんでした！初心者には難しい部分ですね…」

「書の鑑賞は、なんて書いてあるのか…読むもの」として先に見てしまふ人が多いですね。書いてある文字を読みとることができず、鑑賞が止まってしまふ…それはとてももったいない。書は視覚芸術でもあるので、その観点から見てもいいですね。」



※1. 公開制作の様子 (2021年 10月22、23日)



書を楽しむ

「公開制作※1お疲れさまでした。駅舎で、かつ期日前選挙会場横での制作ということで、大変多くの方にご覧いただくことができました。身体全体を使って書かれた「為」…なぜこの字を選ばれたのでしょうか。」

「この企画展のコンセプトを聞いて、改めて「仕事って何だろう」と考えたときに、辻井先生が会報の巻頭言で「仕事」のことを「為事」と表記していたことを思い出したのが、この字を書くきっかけでした。昔は「事を為す」という意味で使っていたそうです。働く意味の「仕事」だけではなく、自分の「為す」ことはなんだろうと考えながら、「為」の字を書きました。」

「これまで、出来上がった書作を見て「なんて書いてるんだろ…」なんて思っていました。実際の制作現場を目にして、そもそも着眼点がズレていたことに気づきました。黒と白のデザイン性、書くために必要なリズム、スピード、

身体性。何を書くかを選ぶセンス…書って総合芸術のようだなと思いました。」

「まさに、ある詩人も書は総合芸術であると言っていました。私自身は、「この字を作品にするためにと考えるとき、ひとまず草稿は練りますが、あとは書きながらつくっていく事が多いです。書は動きがそのまま形になるのでリズムを変えたり、大胆に攻めてみたり色々試しながら…。何度も書いていくと文字と身体がリンクしていくって、振り付けを覚えていくような感じですかね。書くのは一瞬ですが、考えることは多いです。」

「チョイスする言葉はどうやって決めているのでしょうか。」

「様々な詩などを読んで共感したものの、特に自分の経験と言葉が合致してその言葉に実感が持てた時に「書くぞ」という気持ちになります。」※2・3

「他人の言葉を扱うのはなかなか難しいですが。」

「私の場合、作者の考えを汲み取



※4.「鹿」135×70cm / 2016年

—そういう意味では、タイトル「墨のいろ、白の形」に伊藤さんからの大変わかりやすいメッセージ性を感じました。

「書の見方を、『読むもの』とは違う視点で見てほしいと思って、このタイトルにしました。書の鑑賞において、文字が読めることはもちろん大事ですが、第一ではないと思っています。まずぱっと見て視覚芸術として「いいな！」と思ってもらい、キャプションを見て『読める！』という2段階で鑑賞が深まってほしいです。」

—過去にアルテピアッツァびばいで行われた個展内で拝見した作品「鹿」※4は、びっくりするくらい「鹿」でした。

「当時勤務していたアルテピアッツァびばい※5は山に囲まれた場所で、鹿ももちろん出ます。そこで鹿を見た時に象形文字の「鹿」字に妙に親近感が湧いてしまっって：制作することになりました。漢字の始まりは絵でしたから、文字として読めずとも、鹿を感じてもらえると思いました。」

—私が持つ鹿の印象と伊藤さんの鹿感を共有できた気がしたんですよ。書であんな経験をしたのは衝撃的でした。

「アルテピアッツァびばいに勤めていた当時は自然の景色に感じるものがあって、自然が題材の言葉をよく書いていました。一方で、モエリ沼公園に勤めている今は自然ももちろんですが、人の心とか営みとか、そういう人間くさい題材の言葉も選ぶようになってきました。年を重ねているということかもしれません。」

—なるほど！作品を通じて、私たちは伊藤さんの見ている景色や興味のあるものを見ていることになるという事ですね。書の楽しみ方って奥深い…。

経験を積む〜中国留学について

—学生時代のお話もお聞かせください。学生時代に大事にしていたことはありますか？

「経験」を大事にしていたかなと思います。大人に相談するつもりでなく、大学から先生からは、道具を持っていくと書に逃げるから持つていくな、と言われていたので、道具は何も持って行きませんでした。喋れるようになってから、博物館や書の名品を巡る旅行に出かけて中国の書に触れました。」

—ひたすら語学に向き合っていて、めちゃくちゃ濃そうな日々ですね。

「毎日戸惑いと驚きの連続でした。留学中は日記をつけていたんですが、帰国後しばらくして読み返してみると、最初の1ヶ月で起こったと思っていたあらゆる事が実は1週間の出来事だったり。それぐらい濃い留学生活でした。10ヶ月でしたが忘れられない経験です。」

—今、留学するかを悩んでいる学生もいると思いますが…

「新型コロナウイルスの影響でなかなか難しいかもしれませんが、行けるのであれば是非行ってみたいと思います。あの時「海外に行く！」と言っていたのはまさにその通りだったと思います。」



※5.アルテピアッツァびばいでの様子



※6.中国留学時の様子

んな「海外に行け！」と云うので、経験を積むために中国留学※6をすることにしました。学生時代は本当に贅沢で恵まれた環境でした。」

—中国留学ではどんな経験をしたのでしょうか。

「やるしかない！という状況でした。ろくに喋れなかったのですが、お店に行ってもご飯を注文できなかった。最初はメニューを指差してできるお店を探して通っていました。必然的に、生活するために言葉を覚えていきましたね。大変でしたが、楽しかったです。留学の経験があったからこそ、今では何が起ころっていてもあまり慌てなくなりました。」

肝心の語学勉強の方は、最初の中国語クラスが一番下の初級一班で、英語圏の人たちと「我」の書き方から始まりました。書いても話せなかった。寮に戻ってからも勉強して、クラスメイトと会話ができるようになるまで3ヶ月かかりました。」

—中国でも書道をやっていたのですか？

ZAWA+

ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また“人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.02 伊藤宏介「墨のいる、白の形」

会期：2021年12月1日(水)～12月13日(月)

時間：10:00～12:00、13:00～16:00(※最終日は15時まで)

会場：北海道教育大学岩見沢校BOX [i-BOX]

岩見沢市有明町南1番地1 JR岩見沢複合駅舎 有明交流プラザ2階
入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校i-BOX

尾崎芳子 / 煤田真実 / 藤野留朱

佐藤夏月 / 藤本悠平 / 中島聡一郎



岩教から、その先へ

「仕事と制作のバランスはどのようになっているのでしょうか？」

「仕事が忙しくても、公募展は休まず出すようにしています。一度休むと、次立ち上がるのが大変なんですよね。自分はサボり癖があるので、締め切りを作ってモチベーションを保っています。あとは、人に作品を見てもらって制作が単調にならないように心掛けています。」

「客観性が欲しい、ということでしょうか。」

「一人で書いていると作品が変な方向に行っちゃうんですよね。私が所属する「書圈」には書が続けたいと思う同じ志の人がいて、作品を見せ合う時間があって、それがとても貴重に思います。自分の制作の確認作業にもなるし、課題が

見つければ意欲も湧いてくる。そうやって環境を作って細く長く仕事と制作を両立していきたいと思っています。」

「今後はどんな生き方をしていきたいですか？」

「書はこれからも続けていくとして、作品のために常にアンテナを張っていたいです。なので、これまでの自然と美術が身近にある場所で働かせてもらえるのは本当にありがたいです。河井寛次郎の「暮らしが仕事、仕事が暮らし」という言葉があって、これが社会に出るから強く心に残るようになってきました。どちらも疎かにはできないし線引きもできない。全てを糧にするつもりで何事にも取り組んでいきたいですね。」

